

NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 3 LESSON 7 授業例②

Y.Y. 先生

指導計画表

(全7時間)

時間	学習内容・主な活動
1	<ul style="list-style-type: none">■とびら・プレ活動■GET -Part 1, Part 2-・文法の導入-Drill・ペアで Speak
2	<ul style="list-style-type: none">■GET -Part 1, Part 2-・文法の復習-Listening・Listening から Dictation へ
3	<ul style="list-style-type: none">■GET -Part 1, Part 2-・語句・表現の導入・理解・本文の導入・理解・コミュニケーション活動
4	<ul style="list-style-type: none">■Read・本文導入・語句導入・理解・本文理解
5	<ul style="list-style-type: none">・本文内容確認・ウィリアムさんはどんな人物だと思うか、意見交換
6~7	<ul style="list-style-type: none">・世界を変えた少年クレイグ・キールバーガー（12歳）の紹介（講演：「フリー・ザ・チルドレン・ジャパン」スタッフより）・自分にできることを考え、実行に移す
8	<ul style="list-style-type: none">■Speak・教科書（p.87）①～⑨のトピックについてペアで話す・自分が話したことを英語で書く・書いたものを発表する・他の生徒は、聞き取り、聞き取ったものをノートに要約を書く（次回の授業の最初の10分で同じことを繰り返す）

実践例

1. はじめに

LESSON 7 のねらいは、教科書の記載「ひとりの少年の生き方を通し、創意工夫や社会貢献について関心を高める」を更に一步前進し、「関心を高め、行動できる」生徒を育てることにある。そのために、Read のマラウイの少年の「We Can Change Our World」を熟読する。そして、後述の世界を変えた14歳の少年の話をし、ワークショップを行う。そして、コミュニケーション力を高める活動を最後のSpeakの箇所で行う。

2. 授業の流れ

1 時間目

デジタル教材より LESSON 7 のとびらの写真をテレビの画面に映し、タイトル「We Can Change Our World」と少年の写真から教師より質問をする

1. Where does this boy live?
2. What is this boy doing?
3. From the title of this lesson, who can change the world? Or who changed the world?
4. Did this boy change the world? What do you think?
5. Do you think you can change the world?

この時点では、生徒に正解を告げず、Readの本文の学習時まで保留しておく。GETのPart1の文法の説明、および教科書のDrillで「want+ A + to～」の文法事項を学習する。その後、ペアでSpeakの指示に従い、課題に取り組む。1度、課題を終えた後、次のステップとして、ペアでの活動を入れる。Bob, Miho, Ami, Mr. Smithそれぞれが生徒に何をしてもらいたいのかを口頭で言う。それを、パートナーが聞き、間違いがないかの確認を行う。以下は、そのやりとりを示している。

- (Bob) S1: student 1, S2: student 2
S1: Bob wants you to open the door.
S2: That's correct.
(Miho)
S1: Miho wants you to help with her homework.
S2: That's right.

最後に口頭で発した文章をノートに記入し、教師が確認をする。

Part 2でも同様に、文法説明の後、Drillで間接疑問文に慣れさせる。

2 時間目

前時の文法の復習後、教科書のListeningの箇所に取り組む。文法事項を学習した後のListeningなので、内容は理解できており、教科書の問題を解くには支障はない。そこで、学習を更に深めるために、Listeningのscriptをshadowingする。短い会話文なので、shadowingはshadowingにならず、デジタル教材と同時に台詞が生徒の口から自然と出てくるようになる。その後、口から自然と出てくる台詞をノートに書きとる。この段階になると、文法事項が定着し、学習した文法事項を交えた1文がスラロ口から出てくる。

3 時間目

GET-Part 1, 2-の語句等の導入後、本文の導入を行い、プリント(資料1)で内容を理解する。コミュニケーションの活動としては、NEW CROWN アクティビティアイデア集3の「もっともっと知ろう!」(間接疑問文)、「頼みたいことがあります」(want 人 to～)を活用するとよい。

4 時間目

Readの導入では、1時間目で生徒にたずねた質問をもう一度たずね、教師が簡単に答えを言うこと

なく、本文を読んでいく中で生徒自身が答えを見つけていく過程を重要視する。次に内容把握のためのプリント（資料1）を活用する。クラス全体で穴埋めをしながら、内容理解を図る。

その後、音読の練習に移る。目標は、正しい発音、リズムで音読できるようにすること。

- ①デジタル教材の音声による model reading を聞かせる。
- ②デジタル教材の後について choral reading を行う。
- ③個人のペースで buzz reading を行う。
- ④read and look up 方式で 1 文ずつ choral reading を行う。
- ⑤ペアで 1 行ずつ交互に読む。
- ⑥ペアで一人が日本語、もう片方が英語を読む。（その逆も行う）
- ⑦ペアで一人がランダムに日本語を読み、もう片方が英語に訳す。（その逆も行う）
- ⑧教師がクラス全体に日本語を言い、生徒が英語に訳す。

5 時間目

NEW CROWN 3 ワークシート集にある本文内容理解のためのプリントを使用。その後、「ウィリアムさんは、どのような人物だと思うか。」についてペアで意見交換を行う。その後、全体でシェアリングを行い、本文の内容理解を深める。

3. 世界を変えた少年

クレイグ・キールバーガー

6 時間目

教科書で学習した「We Can Change Our World」を他人事ではなく、より生徒自身の側に引き寄せるべく、生徒と同年代で世界を変えようとし、友達と自発的に活動を始め、そして大人たちを動かし、その活動の舞台を世界中に持つことに至った少年の話を紹介する。それは、可能であればその少年が創設した団体フリー・ザ・チルドレン・ジャパンのスタッフの方に来ていただき、ワークショップ形式の講演をしていただくのがよい。この団体設立のきつ

かけがホームページで紹介されている。以下がその概略である。

1995 年、当時 12 歳だったクレイグくんはある新聞記事を目にした。その内容は、イクバル・マシフという 12 歳の少年についてだった。貧しい暮らしのため、イクバルは幼い頃に両親から引き離され工場に売られ、週に 6 日、1 日 12 時間の労働を強いられていた。そのような環境で過ごしていた中、ある日 NGO の助けで工場から脱出することができた。その後は児童労働反対を訴える活動家としてパキスタンや欧米諸国など、各国をまわっていた。しかし母国に戻った際に、彼は何者かに射殺されて亡くなったという。

この記事を読んだクレイグは、同い年の少年の死や彼が過ごしてきた環境との違いを知り、衝撃を受けた。そこで、子どもの問題は自分たち子どもで取り組もうと思い、「フリー・ザ・チルドレン (FTC)」を設立した。彼の活動は、多くの人から支持され、参加者が増えていったという。(FTCJ ホームページ, <http://www.ftcj.com/about-us/history-ftc.html>)

4. Gift + Issue = Change (特技, 好きな事) + 問題 = 変化

7 時間目

講演を聞いた後、生徒一人ひとりが自分の得意なことや好きなこと、今気になっている問題点などと関係づけ、解決策を考える活動を行う。例えば、「ぼくは、サッカーが得意である。今、気になっていることはクラスで仲間に入りにくい生徒がいたり、いじめられたりする生徒がいることである。ぼくは、その生徒と一緒にサッカーをして友達になり、サッカーの仲間の輪を広げることにより、いじめをなくしていきたい。」などの例をあげると、生徒も考えやすくなる。また、このような活動を行うことにより、実際に「生徒会役員として、私たちに何かできることはないかな。」と覚醒する生徒が出てきた。そして、実際に取り組んだのはペットボトルキャップをある業者に送ると途上国の貧しい子ども達にワクチンの予防接種を受けられるようになるという活動である。生徒は、このワークショップ以降

に「What can we do?」をキーワードとして、行動に移すことができるようになった。この活動は、生徒会役員が変わっても良き伝統として、3期目ではあるが未だ続いている。

5. Speak (教科書 p.87)

ーチャットを楽しもう

8 時間目

教科書 LESSON 7 の最終である「Speakーチャットを楽しもう」では、ペアでの活動を中心に行う。①～⑨の質問を一枚一枚のカードにし、ペアのほぼ中心地点に束ねて置く。じゃんけんをして、勝ったほうから一枚引き、パートナーに対してカードに記載された質問を投げかける。パートナーは、質問に答えるだけでなく、更に関連する情報を1文付け加える。そして、逆にカードを引いた人に対して同じ質問を行い、質問の答えに加えて関連情報を伝える。これが、Question-Answer-Question (QAQ) のパターンである。さらに、負荷をかけた取り組みにしていくと Question-Answer-Answer-Question (QAAQ) という形にし、2つ目の Answer の部分には、自分の感想などを入れることも可能である。2つ目の Answer の後には、更なる Answer を付け加え、文章を更に増やすことが可能になる。このようにして、少しずつ負荷をかけながら発話量を増やしていく方法がある。また、教科書の指示にあるように Listener は、時折会話を深めるために質問を入れることも可能である。QAQ の例および、QAAQ の例を下記に示したいと思う。

QAQ (S1: student 1, S2: student 2)
S1: When do you feel happy? (Q)
S2: I feel happy when I finish a lot of summer homework earlier. (A)
How about you? When do you feel happy? (Q)

QAAQ (S1: student 1, S2: student 2)
S1: What do you remember the most about your school trip? (Q)
S2: I remember that I stayed at local family's house in Okinawa the most.(A)
I never forget making the traditional Okinawa snack with them. (A)

How about you? What do you remember the most about your school trip? (Q)

QAQ から始めたチャットは、徐々に QAAQ と発展し、更には A の数が増えて行き、楽しくチャットに没頭している生徒たちの姿が見られる。予め指示を出しておくこととスムーズに次の活動に移行することができるのだが、時間が来たら生徒はノートに自分が話した内容をできるだけたくさん書く作業に入る。教科書の指示にあるように、ペアの話の内容も織り交ぜることとする。そして、その英作文を発表する。英作文の例文を下記に示したいと思う。

Our topic was "What do you remember the most about your school trip?" I remember that I stayed at local family's house in Okinawa the most. It was my first time to stay at somebody else's house. I was very nervous at first. But when I made traditional snack "sata-andagi", I noticed their kindness. I enjoyed that time very much. Taro remembers that he took a banana boat with his classmates the most. He liked the beautiful beach in Okinawa. He was very looking forward to getting on a banana boat. He enjoyed it a lot. He said that he had a great time there.

ある生徒が発表をしている間、他の生徒はその発表内容を聞き取り、そして内容を要約したものをノートに記入する。このような活動を行うことにより、全生徒が活動に参加し、「聞く」、「話す」、「書く」の練習を行っていることになる。

(参考文献)

- ・NEW CROWN アクティビティアイデア集3, 三省堂
- ・特定非営利活動法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン, <http://www.ftcj.com/about-us/history-ftc.html>